

『われらの政府』、ロシア亡命政治家 マクシム・ヴィナヴェルのクリミア政府回想録

 林 由貴

はじめに¹

革命後、欧州に新たな生活の場を探し求めたロシアからの亡命知識人が、故郷への帰還が見込めない滞欧数十年の暮らしのはじまりに没頭した活動は、革命に関する回想録の執筆であった。それらの多くは、「失われた祖国」への郷愁、愛着、そして内輪にのみ親密な雰囲気と閉鎖性に覆われており、およそ革命の当事者にしか理解しえないものであった。

欧州のロシア亡命者コミュニティの中で、こうした際限のない回想録執筆ブームを批判したのは、カデット（立憲民主党）のリベラル系知識人だったのだが、その批判の中心にあったのはミリュコフと彼の政治的盟友でユダヤ系のマクシム・ヴィナヴェルである²。

ロシア史研究におけるミリュコフの存在感はここで繰り返す必要もないくらいだが、ヴィナヴェルはユダヤ文化やシオニズム研究などの民族的な文脈³において、もしくはロシアにおけるリベラリズムを主題とした研究において、せいぜい脇役として叙述されてきたにすぎない。政治家ミリュコフは進歩主義的な歴史家として知られている⁴が、研究者からそれほど大きな関心を集めなかったヴィナヴェルも同様の思想を持ち、歴史記述には熱心に取り組んでいる。また在外ロシア社会におけるリベラル思想の旗手として、パリでミリュコフとともに『パスレドニエ・ノーヴォスチ（最新報知）』や文芸雑誌『環（ズヴェノー）』の編集委員としてジャーナリズム活動を支え、晩年はクリミア政府回想録『われらの政府』の執筆に打ち込む。近年ケリネルが、この隠れたユダヤ系進歩主義者を再発見し、ようやく本格的なバイオグラフィーを書いた⁵ようだが、筆者の関心はヴィナヴェルの政治回想録に見られる独創的なエクリチュールの作法にある。1920年代の在外ロシア社会を騒がせた、かの革命と祖国に関する回想録ブーム⁶と比較して、彼の著述行為には、いかなる文学的意義があったのか。また、それはいかにして歴史的な妥当性を得たのだろうか。

件の回想録ブームが、いわゆる白系の有名、無名の亡命者による自己の正統性の主張の試みであったとすれば、ヴィナヴェルの回想録においては、究極的にそれ以上のものが目指されていたのである。ほぼ同時期の1927年にパリで出版され、現代においてもなおロシア革命史の証言として世界的に知られる帝政外相サゾノフの政治回想録『追憶』⁷は、おそらくヴィナヴェルの政治回想録と競合するテキストである。これらを比較することで、

ヴィナヴェルの独自性を明るみに出すことができると思われる。

これは、歴史研究者、文学研究者双方にとって研究の死角となっていた、亡命者における政治回想のエクリチュール、言い換えれば、執筆困難な条件下における歴史記述の可能性について、主に資料の不在と、回想録の権威という視点から論ずる試みである。

1. 政治回想録の構想

『われらの政府』（1928）は、1918年から1919年におけるクリミア半島での民主主義政府の立ち上げから崩壊までの内情、政権運営に携わった人物、そこで外相を務めたヴィナヴェルの行動と心情を丹念に描いた未完の政治回想録である。原著者マクシム・ヴィナヴェルの死後、息子のエヴゲーニィ（ウジェーヌ）⁸によって原稿が整理され、パリで公刊される。出版されたテキストには、ヴィナヴェルによりロシアから持ち込まれたアーカイヴ資料（公的な書簡、令状等）と、父の死によって未完となった第7章が元の原稿の末尾に付け加えられた⁹。

当時、欧州の在外ロシア社会において革命期ロシアの回想録ブームが起こっていたことと、多様なイデオロギーに分裂したロシア亡命者どうしの対立が深刻化していた中で、クリミア政府に関する事実を明らかにしておく必要が生じた。クリミア政府回想録の執筆計画自体は、亡命が決断され実行された1920年から1921年に立ち上がったものだが、この時期には脱稿されず、1926年に本格的に着手された。アーカイヴ資料によれば、その年彼はかつての友人、知人から証言を集めようと試みていたようである。

1919年にパリのホテル・ルテティアでのことを覚えておいででしょう。あなたがリヴォヴィチ殿下とA.I. コノヴァロフと共にクリミア政府代表としてクレマンソーとお会いになった際の、彼との交渉について、あなたは私どもに大変つまびらかに、かつはっきりとお話しになったではありませんか。あなたのお話は、ある意味でクリミア政府のあらゆる謎を解く鍵だったのです。私は今、われらのクリミア政府の歴史を書いております。これは、共に仕事をした、われらの共通の友に対する私の責務なのです。ただしこの歴史書の完成のためには、クレマンソーの言辞の正確なところと、場所、日付を明示されたうえで、会談がどう進展したのか、可能な限り正確に復元しなければなりません。〈…〉¹⁰

ヴィナヴェルの政治回想録は、一読しても革命期の様々なイデオロギー対立を超越しているようなのだが、ここに挙げた友人への書簡からも、在外ロシア社会におけるあれやこれやの政治対立を気にかけて書いている様子は微塵も見られない。ただ「書くこと」への使命感と焦燥が、かつての同僚に対する歴史的責任として表明されており、それが正確な証言、つまり「声」による立証によって過去を復元しようとする強い欲求として現れている。

しかしそうした「声」蒐集の試みは、同時代人が存命であるからこそ可能であり、ほぼ

同時代の歴史を書く上での利点であるといえる。しかしこのことは、執筆者が史料の不在に直面することとも表裏一体である。

ちなみにヴィナヴェルがクリミア政府について書き残そうと考えはじめた 1920 年代初頭は、ミリュコフがロンドンで反ボリシェビキとロシア再生のための宣伝活動に従事し、『新しきロシア』や『ロシアと英国』等の著作を英語で発表していた¹¹頃にあたり、穏健派として知られるカデット左派の生存者が情報戦において積極的な攻防に出ていた。言論上の激しい抗争の中で書かれたテキストは、往々にしてその対立構造においてしか自らの存在意義を保てない。というのもそうしたテキストは、対立関係において自己の正統性を主張し、あらゆる他者よりも優越なポジションを奪取して、権威を確立するために書かれているからである。コジェーヴによれば、対抗行為（抵抗）が現実化すれば権威は破壊されるものである¹²。つまり、言論上の闘いが激化すればするほど、双方が主張する正統性はますます喪失される。

革命を題材とする亡命者による回想録が、当事者にしか理解できない、歴史的妥当性を欠く書物になっては意味がない。止まぬ思想的な対立の中で、自らの意味を失うことも避けなければならない。いかにすればその歴史的書物は、ある世代、ある時代を生き延びることができるのか。このような歴史記述についての問いの答えを探す前に、私たちはまず政治家ヴィナヴェルの肖像を描き出すことにしよう。というのも彼は『われらの政府』の著者であると同時に、自らが回想され書かれる登場人物の一人であり、語り手であるからだ。

2. 文人政治家ヴィナヴェルの肖像

ヴィナヴェルは進歩主義者であり、これまでもロシアのリベラリズム研究で若干言及されてきた¹³ものの、彼の精神の根本的な特徴は、政治史、国制史研究においては取り上げられてこなかった。これら社会科学領域の先行研究は、ロシアのリベラル知識人たちの功罪に着目し、とくに彼らがロシアに導入しようとした西欧の自由主義思想が自国には適さなかったという批判を行うものである¹⁴。ただこうした研究の構図は、むしろ伝統的なスラヴ派對西欧派の対立構造を想起させるもので、新しい理解の枠組みではない。

しかしその場合も、リベラリズムの根本にある自由の概念を、ロシア知識人たちがいかに自己の精神的支柱として実践していたか、という点に焦点が当てられないのならば、ロシア・リベラルといわれた知識人たちの人間学的な意味は忘れ去られたままである。彼らを西欧のリベラル知識人と隔てるのはまさにこの部分である。

ヴィナヴェルの自由に関する思索は、国制における具体的計画の基盤となっているだけでなく、後に彼らの政治活動に関する回想録執筆においてある種の芸術的センスとなって、さらには人間一般に関する言説となって現れてくる。歴史的事実は、ある事件を説明するための揺らぎない証拠となり所与の条件となる。しかし内在的な理性の働きは歴史家の研

究の主な関心から外れ、彼らの方法では捉えることができない¹⁵。筆者は以下で、ヴィナヴェルの内面的特徴を、彼の革命前の伝記執筆活動と、亡命後の在外ロシア知識人による回想に依拠して素描しておきたい。

第二次革命期前後に出版された、セルゲイ・ムロムツェフ¹⁶やアレクサンドル・パソヴェルなどの法律家を中心としてロシア人実務家の生涯を描いた伝記『この頃の記』（«Недавнее»）には、ヴィナヴェルの思想が随所に反映されている。ここで描かれる「美と自由が内面で一体化した¹⁷」弁護士ムロムツェフの姿は、弁護士、代議士、そしてクリミア政府外相を務めたヴィナヴェルが求める理想の法律家像である。

個の権利のための闘いと、国家の原則による完全支配からの防御こそが自由な弁護士の活動の舞台なのである。〈…〉法のための闘い…それが共通のスローガンである。とはいっても法の闘いはこのように多岐の道に分かれていく。〈…〉芸術家が粘土から彫像を創造するように、人生と社会における建設的、組織的、表現的で彫塑的な力を法に見出す者が法の名の下に闘うのである。そうした芸術的で有機的な法との関係は、一貫した論理によってたどり着いた結論によって息吹を得るのではない。また内容の物理的な公正さによるものでもない。それは、形成の過程において、生活規範が紆余曲折することによって活力を得るのである。¹⁸

こうしてヴィナヴェルは市井の法律家たちから法と自由の理想の形を学びとる。またこのような精神は亡命後いっそう深みを得て、在外ロシア社会において友人ギッピウスを感銘させる。彼はジャーナリズムの世界においても自由の象徴と目されていた。

ヴィナヴェルは私に言った。「わたしは、あまりにも長いこと、そして深く、活字に敬意を払っています。最後まで何もかも真実を喋ってしまおうとする欲求に屈してしまわないようにするために…精神的な自由によって満たされているという感覚の下にね。」

もちろん、皆が皆、マクシム・モイセーエヴィチ（筆者注：ヴィナヴェル）がやっているようにふるまえるわけではない。というのも彼には、（自らにも他人に対しても等しい）本当の自由を除いたら、もう一つの別の賜物が与えられていたからだ。それは人格を愛し、人格とは何かということを理解し、あらゆる人格の本質に浸透する才能であった。

このあまりにも貴重な持前によって彼は有能な同伴者を探しあてることができ、一旦探し出せば、「穏やかに信頼する」のである。彼はただ「完全なる精神の自由の感覚がある」ときにだけ、「すっかり真実を述べる」ことができるのだということを、あまりにもよく分かっていた。¹⁹

そしてヴィナヴェルは、自らの政治回想録執筆において、「完全なる精神の自由」を発揮することになる。しかし、そのことによって政治的な正統性の主張にはそぐわない結果

を引き寄せることになる。

3. 生けるアーカイヴとの闘い

ヴィナヴェルのクリミア政府回想録は、特定の思想的構造の提示もなければ、元の前稿が未完であったがために明確なエピソードによって締めくくられることもない。このテキストは、正統性を立証するための政治的アーカイヴ資料と文献がしばしば不在であるというまさにそのネガティブな事実をも露にしながら書き上げられたものである。作者であり同時にテキストの主人公でもある「私」、つまり政治家と歴史家の使命を二重に背負った語り手によって、アーカイヴの在不在はできる限り詳細に伝達される。

ヴィナヴェルは亡命者という特異な生活状況に置かれていることから、とくにドキュメンテーションにおいて多大な困難に見舞われたはずである。にもかかわらず、彼は敢えてアーカイヴの有無を読者に告げ、その資料の詳細に関する叙述を省かない。資料が不在である箇所は、歴史の「綻び」となって様々な疑念、仮説、空想を引き寄せてしまう。たしかに歴史的な正統性とテキストの完成度を自ら揺るがすような「内部事情」の暴露は、普通、積極的に選択される手法であるとは考えにくい。一方そうした暴露的な手法は、空想や架空のイメージ、誤認が内外から混入することを防ぐために逆説的に取られた手段であるといえる。

私は当時義勇軍の将校であった若いほうのグリム（Д.Д. グリムの息子）に、可能な処で、必要な種々のタイプの同盟関係の証明書を集めるよう依頼したのだが、彼が鉛筆で書いたこれらの証明書は今私の手元にある。

テキストにおいて読者が安堵させられるのは、このように資料が「在る」ことを告げられた時であり、『われらの政府』は、実際には、ほとんどがヴィナヴェルの手元に「在る」豊富な資料によって構築されたテキストである。また、資料が自分の手元にあるという、至る処に見られるこの表現によって、外相ヴィナヴェルがクリミアで生きた革命期の時空間と、亡命回想作家ヴィナヴェルが戦間期パリの書斎で筆を執る時空間が唐突に交錯する場面に読者は誘われている。しかもヴィナヴェルは資料が鉛筆で書かれたものか、タイプライターで印字されたものか、そうした活字のディテールから、資料の不完全性においてこそ生じる解釈の可能性²⁰まで記すのである。

こうしたエクリチュールのために、読者はあたかもドキュメンテーションの現場に居合わせるかのような感覚を得るだろう。しかし、歴史編纂プロセスに読者が疑似的に居合わせることは、少なくとも、作者から出来合いの歴史的な世界観を受け取れない、ということの意味する。

読者が想起するのは、革命の争乱から数年を経て、亡命生活の静寂の中で、古い資料に

黙々と目を通す、老いた歴史家の姿である。そうした想起の中で読者は、テキストの別の箇所、作者によって資料の不在を告げられた時に、それを信ずるか、あるいは懐疑するか、ある種の理性的な決断を求められているようでもある。

われわれに送付されてきたドラゴミーロフ将軍の電報の正確なテキストは、残念ながら私の手元に保管されていないが、その事実は議論の余地がない<…>²¹

ここで、議論の余地がないかどうかは、読者が作者の側に一旦降り立ってテキストを検討するかどうかにか託されている。ヴィナヴェルのアーカイヴへの拘りは、それが「在る」ということの表示によってよりも、不在であるということ、そして不十分な情報について、何が不十分か憚りなく書き込もうとすることにこそ現れている。

さて、このような回想録の形式、すなわち歴史編纂過程の追跡と懐疑を含めた能動的な解釈行為に慣れてしまうと、今度は全く別の形式による回想録を前にした時に、その「読み」における感覚の断絶をはっきりと認識するようになるであろう。以上で『われらの政府』における特異なエクリチュールを検討したわけだが、筆者はヴィナヴェルの作法が特殊であって、それ以外の回想録が標準であるというつもりはない。むしろ、別の政治回想録の著者は、まったく資料を提示せずに自らの政治的正統性を立てており、そしてこれが別の特異なアプローチによって達成されているということに気づかねばならないのである。ここで取り上げるのは、ヴィナヴェルの回想録公刊とほぼ同じ頃にパリで出版された、元帝政外相サゾーノフの『追憶』である。

サゾーノフは一時期クリミア政府に身を寄せており、ヴィナヴェルの相談役を務めたこともあるが、ヴィナヴェルによるサゾーノフの評価は極めて低い。

ちょうどその頃エカチェリノダールからサゾーノフが到着した。彼を長らく待っていた。<…> 愛想が良く文化的な人物だが、あらゆるイニシアチヴに欠けている。外務省の生けるアーカイヴのごとく、あらゆる先例に詳しいのだが、それだけの話だった。彼とは、先例において実践されていない新しいプロジェクトについては話すには及ばない。<…> 少なくとも彼は自らの判断に大胆さを備えていたが、ロシアの内政に起こった変動も、そしてまたこの変動が国外でも起こっているというまさにその様子すらも全然把握できていない。²²

『われらの政府』によれば、帝政の「生けるアーカイヴ」であるサゾーノフは実直な人間だが了見が狭く、自分の長い国家勤務人生における経験を超え、崩壊しつつある祖国の新たな形を想像し模索する能力がなかった²³。そうした過去の帝政的な遺産は、ヴィナヴェルにとってクリミア政府の存在根拠になりえず、新たなロシアの復興にも貢献しないと考えられたのである。長きにわたり蓄積された帝政閣僚の政治的知見と、先例への忠実な参

照は、常に新たなプロジェクトを立ち上げようとする進歩主義者の未来、デモクラシーへの意欲と情熱を退けるものだった。

にもかかわらず、帝政ロシアという巨大な正統性を背負ったサゾーノフの政治回想録は現代まで再版され、世界中の歴史家に参照される。ヴィナヴェルのクリミア政府回想録は1928年の初版以降再版はない。政府の短命さにくわえ、その正統性がソヴィエト政権により直ちに打倒されたことは、歴史的忘却の恰好の条件となった。また欧州の在外ロシア社会においても、回想録が書かれ公にされない限りは、異なるイデオロギー陣営の知識人によって誤解されるリスクに晒され続けたのである。しかしヴィナヴェルの回想録は忘却に耐えるいくつかの手法に訴えた。一つには資料が不在であればその由を明示すること、二つ目には政治の回想に抒情を加え、有名、無名を問わず人物と声の描写を積極的に取り入れるということだが、二点目は第4節において検討することとして、ここでは、ヴィナヴェルの回想録とは対照的に忘却に耐えたサゾーノフの政治回想録の手法を注目してみたい。

ヴィナヴェルは徹底してアーカイヴ参照に拘った。またそのことによって他者の声、行動と意見を多く取り入れることができ、語り手による一人称の叙述にもかかわらず、歴史を多声的に復元することができたのである。

対してサゾーノフの回想録はより完璧なモノローグである。また、クリミアにおける約一年間の動静に限定して描いたヴィナヴェルとは対照的に、サゾーノフは、1906年のローマから十月革命期のポーランド、バルカン半島のスラヴ諸国家、コンスタンティノーブル、極東ロシアまでを鳥瞰するダイナミックな世界図を提示する。つまりここでは、20世紀初頭まで存在した欧州とアジアの諸帝国すべてに目配りが届いている。

ではサゾーノフの回想録の本質的な「強さ」は一体どこにあるのか。彼が描く細密画のような歴史的ディテールに捕らわれている間は、恐らく読者が気づくことはないだろう。しかしこの書物を、そうした歴史的事実の綾から一旦離れて分析してみると、驚くほど明快な構造がテキスト全体に根を下ろしていることに気がつく。つまりキリスト教的世界観である。サゾーノフの回想録は、権威ある政治経験と宗教的世界観的に支えられているがために、ヴィナヴェルが晩年の生命を費やした、あのアーカイヴと政府関係者の「声」蒐集の苦闘から免れている。サゾーノフのその都度の言説、つまり「生けるアーカイヴ」は、先例への参照以外を認めないがゆえに、ヴィナヴェルがクリミア政府にいた頃から警戒し、退けようとしたものであった。

4. 史料、権威、感性

サゾーノフという「生けるアーカイヴ」が残した帝政回想録『追憶』は、公刊された文献や、欧州の大きな図書館であれば十分に閲覧できる外交資料集を参照している²⁴。これは入手困難なアーカイヴの数々と直接当事者の「声」が歴史的妥当性を辛うじて保証して

いるヴィナヴェルのテキストとは全く異なっている。ヴィナヴェルが評したように、サゾーノフによって追想された一切は先例の忠実な参照であり、正統性において揺らぎが無い。

亡命生活という資料と証言が蒐集困難な状況にあっても、彼自身の声と文章がそのまま史料的价值を持つかぎり、ほぼ記憶に沿って執筆できる。この場合、「書く」という行為にたどり着くまでの資料収集と事実関係の整理において著者が苦悩することはあまりない。

前節で指摘した、『追憶』の堅牢な構えとなっているキリスト教的世界観は、テキスト冒頭から現れている。規範的な政治的思考を逸脱する事物や感性的なものについては努めて言及しないという傾向も然りながら、まさにこの宗教的な構えが「永遠の実相」的なものの正体であり、『追憶』を時間や歴史的ディテールの交替にも動じさせない。

冒頭描かれるのは、ヴィナヴェルが描いたようなロシアの地方の風景などではない。そこにはカトリックの寺院が聳え立ち、大理石と古い石畳がイタリア半島の陽光に照りかえるあのヨーロッパの心臓、ローマにおいて締めくくられた二十年に渡る滞欧生活と、外交官としての任務の回想である²⁵。サゾーノフの語りは、教皇レオ十三世がロシアのカトリック教徒保護のために行った対露協調に始まり、時の外相イズヴォリスキーによってロシア外務次官ポスト（пост товарища министра）就任を勧められるまでのエピソードに始まる。

率直に言ってしまうと、あまり魅力的ではない次官ポスト就任に同意したのは、当時私の内面に生じた強烈なホームシックと二十年に及ぶ西欧生活での疲れのためであった。私は、何か全く新たな、まだ体験したことのないものか、もしくはただ単なる祖国への帰還を欲していた。モスクワで過ごした幼少期と少年期は私に民族の刻印を捺すものだった。跡形なく消え去ることのなかった子供時代の記憶では、愛国的なフェティシズムや、ロシア人である自分には異質な文化形態を蔑視するというような、醜い誇張は存在しなかった。私はこういう確信のなかで成長した。すなわち、キリスト教道徳の基本的な教義から分かたれることのない民族意識のみが有益で、理に叶っているとの思いである。というのも、キリスト教道徳は多様な民族文化をつなぎ合わせることに貢献し、まさにそれら多様な文化を持つ諸民族のあいだで、全人類的な友好と相互理解を可能にするからである。²⁶

こうして明確に表明されたキリスト教的世界観は、帝政崩壊期におけるポーランド問題についての推論で一応締めくくられる。しかし民族問題についての彼の思考は、ロシアの力無しには解決しえないというものである。つまり帝政ロシアのキリスト教的な「使命」の下に全スラヴ諸民族を統合しようという構想を超え出ることがなかった。

私は、ロシアとポーランドを和解させる任務の実権を取り、この問題を何世紀にもわたって停止させていた地点から引きずりだして、できる限りやろうと決めたのである。これは野心的な夢だったが、尋常でない力によって私はそこへ惹きつけられた。もし我々の協調が、

いつの日か、ロシア、ポーランド、そして全スラヴ民族の幸福の実現へと導くというのであれば、これは、そのまさにその時点で達成しうる究極の成果として、ロシアの皇帝の首唱により起こらなければならない。²⁷

終章におけるポーランド問題への懸念は、冒頭におけるローマ・カトリック教会の政治的動静にかんする叙述と結びつき、多くの個別的な出来事の数々を大きな宗教的な鎖でつなぎ合わせている。こうした構造によって『追憶』は構成上の統一性を得ている。宗教的な信念は本人にとって絶対的ならば、他者がいかに批判しようとも、本人がそれをもとに自己の考えを修正することはありえない。サゾーノフの『追憶』の前提となっている信仰心は壊れることのないアイデンティティーであり、そこでは不滅の真理である。またテキストを全体的に見るに、政治と、これを支える世界観についての叙述を除くならば、一切の無駄を省こうとする傾向が強い。

しかしそのためか、『追憶』には、ヴィナヴェルが『われらの政府』において敢えて書き込んだような、非キリスト教系の民衆²⁸のスケッチはどこにも見られない。対してヴィナヴェルのテキストには、タタールやコサック、カフカス人などがどこからともなく顔を出す。そうした日常を描いたとしても、政治的正統性の証明に役立たず、権威の主張にもならないのだが、ヴィナヴェルは、政治的議論にはやはり役に立たない、周縁的な風景を書いてゆく。一人の人間として目にしたもの、その時の心情とが間歇的にテキストに挟み込まれるのである。セヴァストポリへの政府移転の旅の途中見つけた、丘の上の空き家の光景もその例である。

家の内には独特な荒廃の眺めが広がっていた。広い客間には、長大なグランドピアノのほかには家具がほとんど無かった。家にはベッドもなく、食器もなく、あちこちは絶望的なまでの寒さに覆われていた。そのうえ、退去に間に合わなかったドイツ人中尉が、フロア内の一部屋（書斎）を占拠しており、端にある二部屋には、昼間はいなくなったのに夜には現れる、不思議なカフカスの人々が泊まっていた。彼がどこからきて、どうしてここにいるのか、だれも知らない。²⁹

ヴィナヴェルのテキスト世界には、あらかじめめ込まれた思想の屋台骨はない。自己を取り巻く世界は、彼のアイデンティティーが象られるよりも先に、急激に崩壊してゆく。しかしヴィナヴェルは、そのような状況に置かれてもなお自らの権威を保つにはあまりにも不条理な出来事を隠さず書き残していく。クリミア政府の同盟軍であるはずのドイツ人将兵は、異国の地で堂々と港の装備品を盗んでは列車でベルリンに送っていた。そうした「幼稚な事件」が生じたことについて、ヴィナヴェルはクリミア政府外相としてではなく、人間一般の心理に踏み込んで推察してゆく。

このような者たちは皆、他所の国ではとくに互いの結びつきを強めるものだが、当然のことながら互いの気分をも伝染させてしまう。そうすると、まったくの無作法がはびこる間柄では、外国の新聞がないために、誰も何も知らないような、ロシアに関する問題においてだけでなく、ヨーロッパで吹き荒れた事件に関するゴシップやホラ話の影響を受けやすくなったのである。³⁰

こうした「暴露」的なエクリチュールは、ラダ政権内のショーヴィニズムの実態や、義勇軍によるユダヤ系住民に対するボグロムなどにも及んでいる³¹。つまりウクライナでの革命の経験の記述に際しては、他の帝政閣僚や軍人経験者ほどには自らの権威や政治的立場の立証に心を砕く意図がなかったのだ。そのかわりに彼は伝記的なエクリチュールにこだわった。ある人間の肖像を描くことを得意とするヴィナヴェルは、『この頃の記』に引き続いて、『われらの政府』においても「人間像」と「声」を浮かびださせることに腐心するが、そうした特徴は冒頭から現れている。

暖かい秋の夜だった。ヤルタとアルプカの間にあるガスプリのゴシック建築の屋敷のほうへ、この静かな一角にしては普通でない人ばかりができていた。十五人から二十人といったところであろうか。ヤルタ、アルシュタ、シンフェローポリ、フェオドーシヤ、アルプカからだろう。アレクサンドル一世の、まだ＜神秘的であった＞宰相ゴリツィンが建てた屋敷なのだが、壁には、世代を譲った、レフ・トルストイまでの偉大な作家たちと高官たちの肖像が見える。トルストイは1891年にここで病のため逗留し、その同じ年に、ロシアの地方自治解放運動創始者、すなわちカデットの草分けであり最初の代議士であるイワン・イリイチ・ペトルンケーヴィチがここに住んでいた。³²

作者は冒頭で、帝政の歴史的肖像画を遠近法的に描きつつ、過去の歴史的肖像から徐々に遠ざかって、カデットすなわちリベラル知識人の草創期から、革命期におけるリベラル政治家、つまりヴィナヴェルたちが経験した過酷な現実へと読者を接近させる。そこでヴィナヴェルは人間の感性によってつかみ取れるものを丹念に描いて見せる。以下のような汽車による移動の描写も、歴史的文献よりもはるかに小説を思わせる。

歌がはじまった一軍歌、ジプシー民謡、これら全部を、カフェ・コンセールの歌手のような才能を現した将軍が自ら歌ったのだ。そして停車場ではコサックたちが暖房のきいた駅舎でおしゃべりし、アコーディオンをかき鳴らすのが聞こえていた。大きな駅では、コサックたちは踊りだした。なにかに生き生きとしていて、陽気であった。³³

たしかにヴィナヴェルはアーカイヴに忠実であったが、それは、単に実証主義的な歴史記述に執着していたということを意味しない。彼が同時に、感性的なものの描写に力を入

れていたことで、『われらの政府』は様々な史料が互いの権威と正統性をめぐって闘いあう歴史の力学³⁴のなかで、実存的な時間を得ているということだろうか。

『われらの政府』において、手に入る限りアーカイヴは歴史的妥当性の担保であった。しかしアーカイヴの力だけでは、この書物は忘却から免れえなっただろう。政治的に敗北した彼らのエクリチュールはそれ自体敗北の痕跡だからである。だが、テキストを潤している感性的なものの描写や、不都合なものを敢えて書き込むリアリズム的な態度、そして政治的意味を超えて、多様な人間の声と息吹を再現することで、政治的次元とは関係のない芸術的領域に己の存在意義を確立しているようでもある。それらは歴史家の主観などではなくて、「あらゆる人格の本質に浸透する」作者が模索した文学的な方法の可能性である。

結論

以上、文学研究の立場から、進歩主義者であった亡命政治家の歴史記述の検討を行った。まず歴史家による研究過程と結論の差異は次のようなところに現れるであろう。すなわち私たちが行う作業は、歴史的要因の特定ではなく、歴史と記憶を書き留めるための文学的手法の解明である。

歴史家にとって懸案である要因の特定は、同時に政治回想録を「書く」という作業にいつも先行するわけではない。実際、要因が分からない、混沌とした状況においてもなお政治家は彼が関与した出来事について書かなければならない場面がある。しばしば「書く」というその作業は、要因の特定つまり歴史家的な作業に間に合わずこれに先行する。ヴィナヴェルは手元に無いアーカイヴの存在についても言及しながら書いていったが、彼の「書く」行為は、正統性をめぐる争いを超克するものである。すなわち『われらの政府』は、自らの正統性の証明に何ら貢献しない情景や心情の描写を多く取り入れており、政治家による政治回想録としてはその本来の目的を逸脱している。ヴィナヴェルは、しばしばクリミアの民衆や自然に目を配り、詩的、文学的表現を模索していたのだった。

己の政治的記憶を歴史的真相として懐疑せず、これを不変の宗教的ひな型へ流し込む。このような、サゾーノフの堅牢なモノローグが政治回想録の一つの手法であるとすれば、ヴィナヴェルの方法は、不完全なアーカイヴと証言によってようやく復元した歴史的事実に、記憶に息づくロシアの風景描写を細かく織り込んでゆくものであった。

注

1. 本論は平成 27 年度布施学術基金学術奨励費「若手研究者研究費」および平成 29 年度科研費補助金（16J04617）による成果である。ここに記して謝意を表する。
2. 筆者はこの箇所を別稿（林 由貴「祖国と奉仕：亡命ロシア知識人における進歩的歴史認識の展開（1920-1930 年代）」SLAVISTIKA XXXII 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報、2016 年、186 頁）でも引用しているが、この事情に不案内な読者のために再度引用しておく。「我々の（回想）文学は年月が浅く、ほとんど全てが革命に関するものである。〈…〉ミリュコフは「個人的なく回想」が続くような書物の著者の目的は、事件の直接的な関係者にのみ感知可能な、その事件にまつわる親密な雰囲気へ読者を引き入れることなのである。〈…〉自己の隙限と方法について明確な認識がないが、どうしようもないことに、未だ十分に責任感が浸透していない」（マクシム・ヴィナヴェル「回想文学について」）*Винавер М.М. О Мемуарной литературе // Звено: еженедельный литературный журнал. 31 января 1926. No. 157. С.2-3.*
3. ミリュコフについての先行研究は注 2 の論文に挙げたので参照のこと。前掲書、179 頁。
4. *Милуков П.Н. Сборник материала по чествованию его семидесятилетия 1859-1929. Париж, 1929.*「ロシアが災難と動乱に陥る運命に巡り合わせるとき、ミリュコフは自分の書齋に静かに留まっているわけには既におれなかったのだ。彼は学問と生を分け隔てることはなかった」（左記文献の 53 頁）また、「政治家としてのミリュコフは歴史家としてのミリュコフの反映である」（101 頁）との記述によれば、ミリュコフという人物は根本的にはまず歴史家であり、政治活動は人生において副次的なものであった。なおこのミリュコフ回想録編集委員会にもヴィナヴェルの息子エヴゲーニイの名が連なっている（巻頭の編集委員名簿より。この部分にページ数の表記はない）。1926 年から 1929 年にかけては、マクシム・ヴィナヴェルとミリュコフが相次いで逝去したため、エヴゲーニイが彼らそれぞれに関する政治回想録、伝記の編集活動に追われている。
5. *Кельнер В. Е. М. М. Винавер: последние годы жизни (1919-1926). Документы, письма, воспоминания // Русское еврейство в Зарубежье. Т. 1(6). Иерусалим, 1998. С. 309-362.*
6. デニーキンの革命回想録も代表的なものだろう。*Деникин А. И. Очерки русской смуты. Крушение власти и армии. Paris, 1917. A. I. Denikine. La décomposition de l'armée et du pouvoir, février-septembre 1917. Paris, 1921.*
7. 引用には以下を用いた。*Сазонов С.Д. Воспоминания. М., 1991.* なお初版は 1927 年パリで出版されたが、左の 91 年版はそのリプリントであるため旧正書法による表記である。
8. 在外ロシア文化研究において彼の名が目されることは稀だが、マロリーをはじめとする中世の英仏文学研究においては知られている。主著に *E. Vinaver. Le roman de Tristan et Iseut dans l'œuvre de Thomas Malory. Paris, 1925.* など
9. *Винавер М.М. Наше правительство (Крымские воспоминания 1918-1919 г.г.). Париж, 1928. С. V-VII.*
10. ГАРФ. Ф. р-5818. оп. 1. хр. 182.
11. *Александров С. А. Лидер российских кадетов. С. 63., P. N. Miliukov. Russia and England. London, 1920. p.36.* またこのような動きに対抗してメリグノフはミリュコフの政治的リーダーシップと歴史観を非難する書物を公刊する。*Мельгунов С. П. Гражданская война в освещении П. Н. Милукова (По поводу «Россия на переломе»). Критико-библиографический очерк. Париж, 1929.* こうした応酬は活字上の対立に留まらず、右翼によるミリュコフ暗殺未遂も起こり、この事件でクリミア政府構成メンバーであったナボコフが銃弾を受け絶命したことは有名である。
12. アレクサンドル・コジューヴ（今村 真介訳）『権威の概念』法政大学出版局、2010 年、50 頁
13. *W. G. Rosenberg. Liberals in the Russian Revolution. Princeton & New Jersey, 1974. C. Gassenschmidt. Jewish Liberal Politics in Tsarist Russia, 1900-1914. Oxford, 1995.* 前者はウクライナにおけるミリュコフとヴィナヴェルの協働と対立点について、後者はユダヤ知識人としてのヴィナヴェルの活動について指摘している。

14. 池田嘉郎「ロシア革命における共和制の探求」、池田嘉郎 / 草野 佳矢子 編『国政史は躍動する』刀水書房、2015 年 209-236 頁。池田嘉郎「第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識」『ロシア史研究』、97 巻、2016 年、27-42 頁。なお後者の論文も前者の論文に続いて国制史を主題とし、題目で「ヨーロッパ認識」研究を標ぼうしているが、これはロシア・リベラル知識人が西欧の国制をどう理解しているかについて論じるにとどまっており、実際にはその思想や、いわゆる哲学的な「認識」の問題を主題として論じたものではない。
15. この点についてゲルーが詳細に検討している。*M. Gueroult. Dianoématique. Livre II. Philosophie de l'histoire de la philosophie. Paris, 1979. p. 30-31.*
16. *Fischer. Russian Liberalism: From Gentry to Intelligentsia. pp. 58-67.* ムロムツェフはロシア下院（ドゥーマ）初代議長であり穏健派リベラルである。
17. *Винавер М. М. Недавнее. Петроград, 1917. С. 76.*
18. Там же. С. 66-67.
19. *Гиппиус З.Н. У нас в Париже // Собрание сочинений. Т. 13. М., 2012. С. 407.*
20. *Винавер. Наше правительство. С. 44. «Все же этот документ в своем незаконченном виде предствляет некоторый интерес (...)»*
21. Там же. С. 47.
22. Там же. С. 27.
23. Там же. С. 27.
24. *Сазонов. Воспоминания. С.5.*
25. Там же. С.11.
26. Там же. С.11-12.
27. Там же. С. 384.
28. *Винавер. Наше правительство. С. 68.* クリミア政府は政治的にも諸民族の平等を理想としていた。「クリミア政府はクリミアにおける全ての民族の法的な利益の保障を義務であるとする。とりわけ多くのタタール系住民の法的利益と欲求を公正に満たそうと配慮する。」
29. Там же. С.104.
30. Там же. С. 104-105.
31. Там же. С. 42, 53.
32. Там же. С. 1.
33. Там же. С 60.
34. この点については、以下で哲学的に検討されている。ポール・リクール（久米 博訳）「史料の局面—記録文書化された記憶」、『記憶・歴史・忘却＜上＞』、新曜社、2004 年、231-287 頁。

***Nashe Pravitel'stvo* (Our Government), Memoires of the Crimean Government of Russian Émigré Statesman Maksim Vinaver**

Yuki Hayashi

Vindication of legitimacy in Russian émigré authors' memoirs was an inevitable mission as the chaotic situation in the October Revolution soon controlled the Soviet government. On the other hand, in Western Europe in the interwar period, Russian émigré intellectuals published in haste a variety of memoirs and histories, some of which earned a wide readership while the authors were alive; others were, as evaluated by the émigré liberal historian Miliukov, negative, simple depictions of a certain intimacy among the émigré community or very personal impressions of the revolution, which had no historical validity. *Memoires of the Crimean government* by a liberal statesman in the Russian Jewry, Maksim Vinaver, was an edition written with difficult access to archival documents; it reached a certain perfection but remained uncompleted. Thus, the main subject of this article is to determine the historical validity of the several depictions of the revolution by Russian liberal intellectuals in exile.

Vinaver indicates in his memoirs a potential solution to the absence of historical materials. First, a deep respect for the voices, lives, and identities of the participants in the government in addition to all negative political factors against them are represented in the historical portrayal. Second, although vindication of the legitimacy of the Crimean government is not the first focus, the lack of documentary evidence of the Crimean government's legitimacy is intentionally exposed in Vinaver's depiction. According to our investigation, the memoirs are not composed of a simple fidelity to the past and the dedication of the Russian liberal author to the validity of history itself resulted in an imperfect depiction. However, there is ample scope for future ideas for social progress and criticism against an absolutist attitude toward an imperial past.